

missouri



文淵閣

圖書

桐壺帝  
侍立位

桐壺

源氏君誕生(う)

人情鑑

○桐壺更衣とたうきす

○源氏君それり

さ

○源氏君名鷹

○桐壺更衣病ひす筆とゆうれぐ肉うすてやう

○のま立坊

源氏君誕生(う)

人情鑑

歲五 岁四 岁三 岁二 誕生 源氏君



歲二十 歲一十 歲十 歲九 歲八 歲七 歲六

○二条院と造り

○源氏君え後すねかのちのゆくに舞う

八歳から  
星との方  
す年を過す  
の子孫原  
民玉とお  
ますせん  
君とまわ  
の帝けと  
はてもす  
くとくと  
義とくと  
内侍院と  
玄女院と○源氏君の外祖母  
相姫更衣  
の母

うそす

ほ

け

。源氏君十三歳もう十九歳とのひがみの連句

奉書方洋  
源氏君  
住中將

歲六十	歲五十	歲四十	歲三十
-----	-----	-----	-----

帝木 夏空蟬口 夏良十月一葉

文

。あまのゆきとくめ  
。源氏君方たゞよ紀伊の中川の都にやまきをはるかに

えまよ

。舞ひ口へあまきとくめ

。ちく木まうのゆき中川の都にとまくとあまきとくめ

。口君中川乃ゑよりてとまくとくめ

。中川乃ゑよりてとまくとくめ

。源氏君タモとの夜に舞ひとくめ  
。あまきとくめとタモとの夜とえとくめ

。住中將

。源氏君タモとの夜に舞ひとくめ  
。八月十五日一あまきとくめ

。次の夜うへあまきとくめ

。源氏君十三歳十九歳の九月廿日のやまとおこづかとくめ

。あまきとくめ

。タモと四十九日の法事代えの法事堂までとくめ  
。中條君丈の住中將に具つて住中將十月節日とくめ

十九  
冬上

歲七十

源氏君  
寧相

## 賀のちみ

秋

文

春

正月一日朝津又年より

○二月十九日義姫の末行産  
皇子誕生後之を冷泉院とす

○七月義姫立后。源氏君は寧相  
帝沙謙位の時公卿ひ迎へる事

件の  
件

源氏君  
寧相

五十六

歲

九

冷泉院  
准便

十

源氏君  
西三位

も

お茶賀十九の秋と

冬十月十三日朱雀院  
御まつて源氏君三位  
次申の正に信下ふ新八  
○紫苑上祖母の除賛十  
月晦日秋立く

紫

春

三月十日正月より

○門脇にかねのる小山  
の雪せせらかに御所  
宝上とかまくらす  
○義姫え病よら  
て二条のえようす  
タム源氏君ひそ小  
えゆくよし

文

秋

正月

す

○九月廿日のやうに  
紫苑上祖母をすよ  
○十月に朱雀院へ  
御まつて源氏君三位  
家へ下りてひび  
ゆふくよ

秋

正月

す

○八月廿日正月より源氏  
君まつむをに急知  
きよ  
○又の日朱雀院のけ  
まの樂人翁人ひあ  
ひよ下りて又えをき  
翁ひよ下りて又えを  
翁ひよ下りて又えを

春臘月夜の  
源氏君忍ひて未  
つむ花の聲を多  
きよ  
○二月ほせ尼づ  
ハヤミ

○正月二十日  
源氏君忍ひて未  
つむ花の聲を多  
きよ

歲

十

未稿充十九の正月と

人々に鑒原氏君

桐壺帝  
の御賓位  
朱雀院  
漫禪冷  
泉洗の立  
訪のまか  
とげ二年  
の君にさ

## 花宴

春

- 二月廿余日南殿の様の宴行す其衣冠は君弘徽殿の細殿より是ひて臘月をもよきゆり
- 又の日後宴行す
- 三月廿余日ニ象右衛門のらのけうる君の宴行す

源氏君  
太將

お宿か  
○源氏君今年大内に宿をうちよし若葉上より入る

## 二十一歳

豪(九月)と

- 世中うりてす朱雀院の御代をめどりとひす
- 赤坊の服あやめにのうへてト定の年いまくらひす
- 芙蓉上賛狂
- 桐壺帝の辰腹の女このふ井院工物り
- 糸のくらえ
- 赤院才ニ度の湯復は日葵上か朱雀院門車の三度うらひす
- 奈の日まよ上替えまき
- 葵上あひのけうがひす

## ふの

九月

- 春
- 扇引日源氏君内玉矣
- 又大般よりうす
- 葵上度夕方延生
- 秋のつうきよ
- 八月廿余葵上逝去
- 赤玉度育上入やうやくふよ梅す
- 十月文行す
- 源氏君はよとと影替りす

秋

九月(九月)

- 九月廿日源氏君せ通に
- 門十日宇文群仰六系は裏木もひて伊勢方エリ
- 十月洗桐壺帝
- 十月廿日洗かくわき
- 十月廿日通つ不ふニ系のあ
- ユ筋うす

## 二十二歳

誕生

タ考君

## 二十三歳

四

朱雀院  
在位

## ひの

九月

- 春
- 扇引日源氏君内玉矣
- 又大般よりうす

## 二十四歳

- 九月廿日朱雀院門車の三度うらひす
- 十月洗桐壺帝
- 十月廿日洗かくわき
- 十月廿日通つ不ふニ系のあ
- ユ筋うす

## 二十五歳

歲

六

正

須

須磨

サニオの三月まよ  
カセの二月まよ

秋

- 源氏君次ナ一柳ノ里へよて不くふ諸ノス院の山墓ね
- 走り下りて小山工務
- 二月あつて山君次ナユク
- 消ゆ一も

○走り下て三

午

花 故 里

花 故 里

株キトナ

六月

文

○五月廿余日源氏君故里景  
致の事と方ひ花 故里の  
四方にかりづ

き

か

- 面のひりへやれり
- 臘月花の尚付アハヤミヒ  
ひてき

- 五月源氏君故里の公室  
マキナリ
- たを後波仕の音をなす

- 青部アラホミ相手の  
一月十日後アマハ達  
絶別の日アハラホミ

冬

秋

- 四月源氏君故里の公室  
マキナリ
- 二月沖運殿夜尚付にあり  
安院宮アモテアモジハ六朝  
兵の御君アリユタリ
- 九月廿日ア

人木齋源氏圖

磨

○二月七日春  
○大般の三位を詔後院仕  
源氏君と訪ひり

寧相よ歎て涙テよまう

○三月引り源氏君  
己の内夜トナヒ雪

満ちれぬ雪

○あ不意風や未だ詔ある  
さうてりひつ成ぬ  
○御石入めの御子の告  
うるようて十三日上りして  
源氏君と御石よひく(あ)

御石

次ノ三月一月

明

○三月三日春  
○二月十三日源氏君母の御  
がくがもいふと朱雀スカニの御母  
さるくにありせす、  
○八月十四日源氏君母の御  
よつて御石よど不す

秋

明石  
御石入

國

明石  
御石入

六

芭生バシ  
九月の秋の月と

はまはまし常漢の  
姫君のまじて源氏君  
源氏君のまじて源氏君  
のまじてとハ遠みほの  
うる

芭生バシ  
九月の秋の月と

石

○秋。六月そくとう御石上候姓  
○七月七日源氏君西涼の  
宣旨シラフ  
○八月七日源氏君西涼の  
宣旨シラフ  
○源氏君入院先御飯之模  
一ヒて二条院より  
○門君の位ヒサギたまてねよ  
り外の様大納ヒシタマす  
○八月十五日君そくらで

芭生バシ  
九月の秋の月と

木

○秋。六月そくとう御石上候姓  
○七月七日源氏君西涼の  
宣旨シラフ  
○八月七日源氏君西涼の  
宣旨シラフ  
○源氏君入院先御飯之模  
一ヒて二条院より  
○門君の位ヒサギたまてねよ  
り外の様大納ヒシタマす  
○八月十五日君そくらで

芭生バシ  
九月の秋の月と

源氏君  
權太納言

芭生バシ  
九月の秋の月と

芭生バシ  
九月の秋の月と

芭生バシ  
九月の秋の月と

芭生バシ  
九月の秋の月と

芭生バシ  
九月の秋の月と

○十月源氏君ハ謹りひ  
○十一月そくら

芭生バシ  
九月の秋の月と

芭生バシ  
九月の秋の月と

芭生バシ  
九月の秋の月と

國

八

七

春	年うりぬまし	源氏君内大臣	○二月東宮冷泉院御元服	○二月東宮冷泉院御元服	十一
秋	九月常陸守源氏君石山道	○九月常陸守源氏君石山道	○六月源氏君不病よつて尼	○六月立房即位兼唐敵のことを上に立房	○六月立房即位兼唐敵のことを上に立房
夏	賛句	○常陸守源氏君	○常陸守源氏君不病よつて尼	○源氏君在立房即位の事に政を改官する。左衛門侍	○源氏君在立房即位の事に政を改官する。左衛門侍
秋	九月常陸守入洛	○九月常陸守入洛	○常陸守源氏君五十九日	○桂中納言	○桂中納言
冬	常陸守源氏君誕生	○常陸守源氏君誕生	○桂中納言の内サ入内	○桂中納言の内サ入内	○桂中納言の内サ入内
春	二月立房源氏君誕生	○二月立房源氏君誕生	○桂中納言の内サ入内	○桂中納言の内サ入内	○桂中納言の内サ入内
夏	三月立房源氏君誕生	○三月立房源氏君誕生	○桂中納言の内サ入内	○桂中納言の内サ入内	○桂中納言の内サ入内
秋	八月桂中納言の内サ入内	○八月桂中納言の内サ入内	○桂中納言の内サ入内	○桂中納言の内サ入内	○桂中納言の内サ入内
冬	九月桂中納言の内サ入内	○九月桂中納言の内サ入内	○桂中納言の内サ入内	○桂中納言の内サ入内	○桂中納言の内サ入内

春	松風館会	○松風館会	○松風館会	○松風館会	○松風館会
秋	○松風館会	○松風館会	○松風館会	○松風館会	○松風館会
夏	○松風館会	○松風館会	○松風館会	○松風館会	○松風館会
秋	○松風館会	○松風館会	○松風館会	○松風館会	○松風館会
冬	○松風館会	○松風館会	○松風館会	○松風館会	○松風館会
春	○松風館会	○松風館会	○松風館会	○松風館会	○松風館会
秋	○松風館会	○松風館会	○松風館会	○松風館会	○松風館会
夏	○松風館会	○松風館会	○松風館会	○松風館会	○松風館会
秋	○松風館会	○松風館会	○松風館会	○松風館会	○松風館会
冬	○松風館会	○松風館会	○松風館会	○松風館会	○松風館会

春	夏	秋	冬
。年々うぬと 。主に政を政を費 。父若	。葵上	。朝	。
。三月薦善女院崩 。次の日被を承教を薨	。主	。胡兵	。
。被の日被を承教を薨	。主	。薦善	。

春	夏	秋	冬
。年々うぬと 。主に政を政を費 。父若	。葵上	。朝	。
。三月薦善女院崩 。次の日被を承教を薨	。主	。胡兵	。
。被の日被を承教を薨	。主	。薦善	。

夕方君  
中将

め

秋

。辛うてはまかねはま  
父よ辛のせやのむき  
。八月源氏君六条院を造り  
そぞうわらひのむねあと  
晉の町花ちく里と良の町  
姉のゆふ  
。五日たりて秋ぬ中玉押  
の町に移りす  
。十月四石上六条院の乾

蟹

秋

。おもろ君ハ懐うすて又ゆせ  
よ活て右近をよき  
。九月三  
。夕方君ゆれとよ  
。おもろ君を右近のふ  
奈のゆふ

九の上  
九七八

國

五

六

夕方君  
侍後

や

春

。秋の國石に夕方君侍後  
。源氏君六条院を造り  
。二月肥後のまえせんを草  
君にむとひて肥前を草  
事あり  
。おもろ君をよき  
。おもろ君ハタよのよもうちを  
の君裏家まで旅あへり十景  
内付少御見  
すりあくハモロシノ弟の  
事あり  
。三千四百の三月と

九  
九九  
九の上  
九七八

國

七

八

人情源氏物語

初音 二十九の お蝶 四月 三月 蝶 七月 九月

春

久松流傳

○年立つて行つたのを代え  
○西月二日お象院源付害

○男路からうる日後宴をへて

三

○二月十九日弟房まきのあがみの内挿し  
○次の日秋ね中まの季仲後継経のため  
友  
○衣うのうちへうき  
○人く歌すとからくゑよかく  
○あの大屋代君がうる君の詩よりうきひとあるのいゆ

十

蝶

胡

初

常古の育みの 築中 朝と暮れ やうり一月 仍音 二月 三月 七日と

○近に居のうへうへ

六

秋  
○秋よしのうき

○八月とせうの年よしのうき

歲

み か 邑 大 築 常

冬  
○二月大原せの行す

歲

八

九

男子の  
聲

。七月より君男子と産  
トハ高弟

度

一

は

冬

春

- 。年うつて主に男聲が行うる音尚待づくやとん内玉まつ
- 。さひ秦多處の東面と曹司とへ又三位の叙(二)
- 。もうこの石田うち中に聲思大なるの處に退か
- 。二月も汝ぬえ
- 。三月よめでえ

歲

七

九

聲思正  
三三少の  
見  
上十三  
聲思正  
中納  
聲思正  
大徳  
聲思正  
大徳

模

彌

益

き ゆ

秋

春

- 。タガラ居寧お中のナースの
- 。八月廿日より君祖母太まの腹ぬき(大喜ハ三月廿日)
- 。もうの尚侍十月ニハ四ニヨモウアシテ一ミウラ

模

彌

益

き ゆ

秋

春

- 。あら石聲思大ねよ重(月)
- 。嘉月ニヨモウ

久松源義

荔枝 三十九の三月  
あくすき

人月齋源氏風鈴

源氏君准  
左上天皇  
夕方君  
中納

二月十日源氏君准が夕方君と來宮で争ひ四方の薦とおのを判りま  
○門石准君が薦とおのを判りま  
○門石准君が夕方君と來宮で争ひ四方の薦とおのを判りま

荔枝

春

○五月晦日源氏君准が夕方君と來宮で争ひ四方の薦とおのを判りま  
○門石准君が薦とおのを判りま  
○門八日灌佛<sup>ミツル</sup>とおもて上御の三所に於けて行ひ  
○門八日灌佛<sup>ミツル</sup>とおもて上御の三所に於けて行ひ  
○門八日灌佛<sup>ミツル</sup>とおもて上御の三所に於けて行ひ

○源氏君准を上天皇。因彦仁を政倅夕方君は中納  
○源氏君准を上天皇。因彦仁を政倅夕方君は中納  
○源氏君准を上天皇。因彦仁を政倅夕方君は中納  
○十月吉奈日が象院より來

荔枝

夏  
秋  
冬

○七月七日源氏君准が夕方君と來宮で争ひ四方の薦とおのを判りま  
○門石准君が薦とおのを判りま  
○門八日灌佛<sup>ミツル</sup>とおもて上御の三所に於けて行ひ

九  
十

セニミ  
ナシタ

右大將  
夕方君

上勅文

春

○年も暮れぬと源氏君准に故りますとお  
○二月十三日源氏君准が夕方君と來宮で争ひ四方の薦とおのを判りま  
○三月十日夕方君と來宮で争ひ四方の薦とおのを判りま  
○四月朱雀院少将に参りま  
○源氏君准が夕方君と來宮で争ひ四方の薦とおのを判りま  
○五月晦日夕方君と來宮で争ひ四方の薦とおのを判りま

佐東  
健

九  
十

セニミ  
ナシタ

口

冬

○七月晦日源氏君准が夕方君と來宮で争ひ四方の薦とおのを判りま  
○二月十三日源氏君准が夕方君と來宮で争ひ四方の薦とおのを判りま  
○三月十日夕方君と來宮で争ひ四方の薦とおのを判りま  
○四月朱雀院少将に参りま  
○五月晦日夕方君と來宮で争ひ四方の薦とおのを判りま

國  
一  
十四

國  
一  
十四

。もろかくて年月もかきあつて  
四千二十九年みまで四年のろばとの仲

か

赤

國二十日 国三十日 国四十日 国五十日

十三

今  
正  
位

下

春

○冷泉院御後一十八年  
○門事の儀後一九年御後禪一九年  
○を教官候はる君二年御後二年御後二年  
大納戸二年御後二年御後二年

夏

○十月申の十日源氏元後二年御後二年  
○女三室二室に御二年  
○假石御席二年御後二年  
○年の事二年

秋

○七月二年御木君二年御後二年  
○八月二年御木君二年御後二年  
○九月二年御木君二年御後二年  
○十月二年御木君二年御後二年

○十月二年御木君二年御後二年  
○十一月二年御木君二年御後二年

生

今  
正  
位

國七十日

國六十日

生

正

位

柏木早八の西月抄

人代鶴源玉鶴

柏

○年々うぬる  
○女こえ某君を産め  
○せこまゆるそくにようて出づ  
○柏木君仕於大納言  
○柏木君死  
○やさしにあれひき某君か十日  
○源氏五十八と十日すてたるひじ

木

秋

○夕月うりよタ青衣衣落葉あとひま

模

横田  
秋

○柏木君二園景に源氏君誦経させよ

笛

○秋の夕れわらわあてて夕方君落葉あと訪ひま  
内宿りあに柏木君の家にまでおまへ一笛といひま

句文

國九  
十  
口

古

延生  
某君

國八  
十  
口

蝶虫

蝶虫のまとう

八月の蝶虫

秋

反

。あらうきの花の葉にまく

虫

秋

。秋こうえ  
十みあめ月

夕

夕

。一束の洋島所あけよがひて山や小都うり  
。八月中のすまう夕方君やまふらう洋島本の夜と詠い  
。旅宿に對面す  
。一束の洋島所をす  
。九月に旅の宿  
。門月さく日夕方君少せにまうり  
。旅宿の束のあにゆうほり夕方君にまうり  
。とあらうにまうりひてかへり

四月

秋

十五

春

春

。家とれくをひきゆ  
。二月吉はまと二束流す洋島所を詠い  
。相臺灣か浦すらじて后のまくとす

夏

。夏の夜まく

秋

。秋の夜まく  
。八月吉はまとす

歲 一十五

歲 一十五

春

立春の事

人間の事

春

立春の事

人間の事

幻

夏

立夏の事

人間の事

夏

立夏の事

人間の事

秋

立秋の事

人間の事

秋

立秋の事

人間の事

冬

立冬の事

人間の事

冬

立冬の事

人間の事

雲隠

車の冬の事で立冬の事——幻事  
匂立事の用ハ年事——  
源氏居はるにかくき事  
夕方事の右方事——

○ 蒼居十九の年 ○ 三佐寧相 中ぬめ故	○ 行行幸神九の年の あ行ハ年三佐寧相 洞主に吟泉主のサ行 のすとソアテモヒア 又男と生るひつとソ 三年をうみてつづぬ	○ 冷泉の芦也と ○ もう君中の贈君に尚侍 とゆつ贈君やうて因よ希 きよ
○ ほ行後とてソアテモヒア あうとソアハ寧れ申ねと みりつやうりつやうみと もとてふうとととととと すなうげ何十九の年のや うもせやれとれよへり 品寧相申わきておひせー 大さにそらあう	○ 蒼居十九の年 ○ 三佐の寧れとてね申ねと あれおひせ	
歲九十	歲八十	歲七十

春	は	や
○四月夕音君のまづのうす うすちあわせすくすまよ 九歳より 大二のそまて	一	九

秋	姫	
○夕音君なたき。紅葉君を遣す。暮君 中納で。之後の君夕音君。暮君相應す。 ○お城左衛門大曾根りしゆふ	秋	○暮君の子庭みにんとけりふ うつゆすすむにてせらうき
秋		○秋の秋のあつこひまむすくとうる ぬまほひいきよけ財暮君を遣す て大三在とくろそーりのひつて に食のあらへ松本君のりとがる ○暮君が夕音君にあらへてう 宿のまよとまよのふ
秋		○十月廿九日の夜に暮君を遣す うけりふ
秋		○二月廿九日の夜に白木院 うけりふ
喜		○喜びのあまき ひうびあまのあまき
喜		○喜びのあまき ひうびあまのあまき
喜		○喜びのあまき ひうびあまのあまき
三	七	八
歲	七	八

寄生  
古に驚異  
せきゆうい  
とてえ  
ことじうは  
そこの年

六櫛 さかのまつり

さかのまつり

五

柳  
おのれの妻の  
わが妻に  
夫の妻

や  
今上の衣香の妻を  
うつてくらせま  
しもくそらのあそび  
遠はあの方

秋  
今上の衣香の妻を  
うつてくらせま  
しもくそらのあそび  
遠はあの方

寄生  
さかのまつり

七

総角

廿四の月

春  
年うつぬま  
花香の口ま  
二家の衣香

久の妻の  
の嫁女  
十七  
木  
個上の武  
十四

九

角  
総角  
廿四の月

秋  
十月秋日白雲引蟻  
虫おとすせせせせせせせ  
よしよしよしよしよしよし  
門月秋日白雲引蟻  
虫おとすせせせせせせせ

九

國

四

九

角  
総角

廿四の月

秋  
十月秋日白雲引蟻  
虫おとすせせせせせせせ  
よしよしよしよしよしよし  
門月秋日白雲引蟻  
虫おとすせせせせせせせ

九

國

四

九

早蕨 さひのめ

蕨早

春  
年うつぬま

春  
年うつぬま  
花香の口ま  
二家の衣香

春

蕨早

春  
年うつぬま

り  
こ

春

蕨早

春  
年うつぬま

春  
年うつぬま  
花香の口ま  
二家の衣香

春

蕨早

春  
年うつぬま

春  
年うつぬま  
花香の口ま  
二家の衣香

春

蕨早

春  
年うつぬま

春  
年うつぬま  
花香の口ま  
二家の衣香

春

蕨早

春  
年うつぬま

國

五

七

蓑居  
權大納  
右大將

萬葉寄生と一年の秋

## 東屋

秋

○八月は舟居とた追おねよ遣せへトセアホキ降ちのまつみとよて  
引たゞてあらの車の始にがまひそむ  
○舟居ニ象徴の西のいましめにあべー移り候りんと彼洗は  
ツタリキハ  
○白あがへは舟居よ歎面トシ  
○舟居の母と白あがのゆすりとよては舟居と三家の事に物  
○秋御くめりこすゆの津を送りとてぬと、萬葉守詠も  
タリ  
○九月ナラウワ若忍いてニ象の御よけくは舟居にまきひユの日  
とりかひてや詠のまに移り—  
トモトモ

春

○四月サニミ萬葉のニ象えよ移く日  
○七月立春日萬葉守詠より新造の御井とよて  
ナム日は舟居守詠のうそを詠えに移り  
ト萬葉の守詠

人代歌萬葉詩

白木の  
蓑居  
權大納  
右大將

## 六

常陸のあ  
太  
二  
三

## 威

## 吟晴

## 舟浮

字歌

たあ西月とう三月の末は舟居の  
年あるとせし初月

○西月初日とう三月  
○のうう内宴をこづへてまく白あが宿よがくは舟居と見  
○二月初日とう萬葉守詠より清り  
○舟居十日とう内の御船御りも便白あが宿よがくは舟居と  
はいは方うどう圓滿なるあれうを船にやくして是日  
○白あが二月の船に萬葉守詠月の十日とうには舟居と見に移  
○船にまくはくめく  
○白あが宿よがくはくめくのがくわは舟居にまく  
○は舟居とあくのふへきかむけゆ

○舟居の年あるとせし初月  
○聖朝うさきの秋  
○は舟居と見  
○秋

○舟居の夏  
○船にまくはくめく  
○白あが二月の船にまく  
○うちものむくにまくにまく  
○あら葉はくはくめく  
○舟居と見  
○秋

○舟居の母  
○權大納  
○舟居守詠

## 藏

## 七

## 社

廿

歲

八

春

○とくもくぬま  
○薰君ちは舟のそとの  
○せきとすふのそとの  
○おはなは丹君のそと  
○尼君の  
○小寺入  
○御紀伊  
○四月八日薰君横川より生  
○せんたに薬師佛にうよをく  
○せんじゆのうじゆ

摺字

夏

○よみがりて例せりてやうに詠ひゆくはまをりあさ  
○又の日薰君横川傍の傍よみうの夜より  
○口若庵よみうりてみの日小石と小石ふきは舟居とい

夏は摺四月

源氏物語  
語意考

すみき草後編

北村久備翁著

二冊 近刻

袖中名所一覽

同人著

小本

一冊 近刻

類字名所和歌集一集うたせ一だい集しゆ詞う國くの  
名所と四季寒雜の類たぐ詞う類たぐ初學の人和か會席  
に除む時懷なま小こて便びんとあへきやうにまわらばらば  
書かふ

本朝年代便覽

両面摺

一枚 已出

十年と一行いわ一百年と一園いわ數百年不とも計へ安あ  
やうにあく年号の日安其外南朝の年号立性たう圖  
朝鮮人琉球人未聘麻疹流行の年号と立性たう圖

文化十二乙亥年七月

京都二條富小路東入町

吉田四郎右衛門

同二條衣ノ棚角

京都書林

風月庄左衛門

同三條高君東入町

江戸橋四日市

松本平助

日本橋新右衛門町

前川六左衛門

中橋廣小路

西宮彌兵衛

山下町

萬屋太次右衛門

江戸書林

